24年12万7，804人、25年13万3，712人、26年14万47人。また、奈良県宿泊統計調査における県中南和の数値では、平成22年は30万9，330人、23年24万6，014人、24年24万3，842人、25年25万3，578人、26年24万8，101人となっている。観光客数については、平成26年に本市を訪れた方は452万人を記録した。

問 本市を訪れた方の観光消費額の推移は。

答 宿泊客及び日帰り客の県内での1人当たりの観光消費額として、奈良県観光客動態調査によると、平成23年の宿泊客は2万4，049円、日帰り客は4，221円、24年の宿泊客2万2，549円、日帰り客3，703円、25年の宿泊客2万6，577円、日帰り客4，009円となっている。

問 本市に宿泊される方の傾向は。

答 民間の旅行予約サイト運営会社による調査では、奈良県の特徴として、『中高年の旅行者、夫婦旅行が多く、若年層が少ない』『名所、旧跡を訪れる観光客が多い』『温泉、食事が弱い』『初めての訪問が多い』といった特徴がある。最近は海外からの宿泊客が増えているが、大阪での宿泊施設の確保が困難になっていること等が大きな要因と思われる。

問 飛鳥広域行政事務組合の中で、高取町は先端医療と医療ツーリズムを考えていると聞いたが、本市もそれと連携することはあるか。

答 本市には、県立医科大学を中心とした数多くの医療施設があり、人口1千人当たりの医師数は、全国でも指折りの多さである。この優位性を宿泊客の増加につなげる可能性は大いにあると考えている。大病院近郊では患者の近親者が宿泊される。優れた技術を持つ病院であれば海外からも患者がやってくる。これらを踏まえて、高取町の先端医療、医療ツーリズムへの取り組みに対して、飛鳥地域をも含めて、連携すべく研究検討を積極的に行っていきたい。また、本市においても、医療ツーリズムの取り組みを積極的に検討していきたい。

問 八木駅南側に建設されるホテルを含む複合施設は、中南和の拠点になると思う。宿泊に向けたメニューを増やす必要があると思うが。

答 今年度は、地方創生の補助金を受け、市内各ホテルにおいて、宿泊費が半額となる『日本遺産認定記念　橿原プレミアム宿泊プラン』を売り出している。ほかにも、宿泊客の飛鳥橿原エリア・中南和エリアの周遊性を高めるために、10月から市内の宿泊客に対して、『かしはらお散歩クーポン』を配布するよう進めている。これは、本市内のみならず、明日香村、高取町、桜井市、吉野町の主な観光施設26カ所への入場料、拝観料等を補助するもので、泊まるだけではなく、じっくりゆっくりの観光をサポートするものである。また、レンタサイクル、レンタカー、MICHIMO、観光ボランティアガイドの利用やナビプラザ、まほろばキッチンでの物産・土産物の購入にも利用できるように考えている。今年4月には、橿原市、高取町、明日香村の40の文化財遺産が日本遺産に認定されたが、この観光資源を活用し、日本国誕生の礎となった飛鳥をPRしていきたい。今後も中南和地域の交流都市拠点として、地域連携を強化し、宿泊増に向けたさまざまなメニューを取り入れていきたい。

問 スポーツツーリズムなども宿泊される方々のメニューとして考えられるのでは。

答 本市には、橿原神宮公苑に設けられた橿原陸上競技場を中心とする幅広い種類のスポーツ施設に加えて、橿原運動公園、万葉の丘スポーツ広場など、市営体育施設の豊富さは県内随一である。今後はスポーツツーリズムの観点から、学生合宿の誘致をベースとして、宿泊促進の取り組みを検討していきたい。また、ラグビーワールドカップや東京オリンピックも控えており、各国が各競技のキャンプ地等を日本国内で求めてくることも予想され、さらなる相乗効果も期待できる。

問 本市全体のホテルの稼働率を向上させるために、大きな収益につながる長期の宿泊を進めるメニューが必要では。

答 本市に宿泊される外国人観光客は、大阪に近いという利便性によるものが大きい。最近、大阪の都市としての観光人気度が上昇しており、海外からの客船も大阪港に多く入港するようになってきている。中国や韓国からの客船は利用料金も安く、学生の旅行にも利用されることが多いことから、釜山と大阪を結ぶ航路会社、釜山にある大学、関係旅行社と提携し、釜山の大学からの教育旅行生約1千名を今年の秋に受け入れるべく調整を図っている。次年度以降も一層連携を強化していきたい。

問 歓迎会や通訳の手配などは考えているのか。

答 歓迎会は国際交流の観点から当然必要であると思っており、実施を前提に検討を進めている。通訳等に関しては、適切な対応をしていきたい。

問 『爆買い』と呼ばれる消費活動が、テレビ等でよく映されているが、イオンモール橿原との連携は考えているか。

答 イオンモール橿原には、県外からの来館者や交通的に本市と近いエリアに在住の方々が多く来られていることから、より密接な関係を築いていく必要があると考えている。アジアからの観光客が本市を目的として来訪されるこ